

日蓮大聖人御書全集

おおたどののにようぼうごへんじ

太田殿女房御返事

はつかんじごく こと

(八寒地獄の事)

新版
1369
〜
1370

おおたどののにようぼうごへんじ はっかんじごく こと

太田殿女房御返事（八寒地獄の事）

けんじ ねん がつ にち

建治3年（'77）11月18日 56歳 大田乗明の妻

かき 青 裏 こそで 綿 じゆうりよう およ そうろう

柿のあおうらの小袖、わた十両に及んで候か。

だいち した ふた じごく いち ねつじごく 炭

この大地の下は二つの地獄あり。一には熱地獄。すみを

熾 の ひ 付 焼 亡 ひ くるがね 湯

おこし、野に火をつけ、しようもうの火、鉄のゆのごと

ざいにん 焼 たいか かみ 投 たいか 鉋 屑

し。罪人のやくることは、大火に紙をなげ、大火にかなくず

投 じごく 焼 盗 ひ 掛

をなぐるがごとし。この地獄へは、やきとりと、火をかけ

敵 攻 もの 妬 むね 焦 によにん お

てかたきをせめ、物をねたみて胸をこがす女人の墮つる

じごく

地獄なり。

に かんじごく じごく はつ

二には寒地獄。この地獄に八つあり。涅槃経に云わく

はつしゆ かんぴようじごく あはらじごく あたた

「八種の寒氷地獄あり。いわゆる阿波々地獄・阿咤々

じごく あららじごく あばばじごく うはつらじごく はずまじごく

地獄・阿羅々地獄・阿婆々地獄・優鉢羅地獄・波頭摩地獄・

くもつずじごく ふんだりじごく うんぬん はちだい 寒 じごく

拘物頭地獄・芬陀利地獄なり」云々。この八大かん地獄は、

寒 責 声 み 色 とう

あるいはかんにせめられたるこえ、あるいは身のいろ等に

そうろう くに 諏 訪 み 池 えつちゆう 立 やま

て候。この国のすわの御いけ、あるいは越中のたて山の

返 かが はくさん 嶺 鳥 羽 閉 寡

かえし、加賀の白山のれいのとりのはねをとじられ、やもめ

媪 裾 冷 雉 子 ゆき 責

おうなのすそのひゆる、ほろろの雪にせめられたるをもつ

知 寒 頤

てしろしめすべし。かんにせめられて、おとがいのわなめく

とう あはは あたた あららとう もう 寒
等を、阿波々・阿咤々・阿羅々等と申す。かんにせめられて、

み 紅 似 ぐれん だいぐれんとう もう
身のくれないににたるを紅蓮・大紅蓮等と申すなり。いかな

ひと じごく 墮 もう よ ひと えふく
る人のこの地獄におつるぞと申せば、この世にて、人の衣服

盗 取 ふぼ ししやうとう 寒 見
をぬすみとり、父母・師匠等のさむげなるをみまいらせて、

われ 厚 温 ちゆうや 過 ひとびと お じごく
我はあつくあたたかにして昼夜をすごす人々の墮つる地獄

なり。

ろくどう なか てんどう もう ところ しよう えふく
六道の中に天道と申すは、その所に生ずるより衣服

調 う こんどう なか しような
ととのおりて生まるところなり。人道の中にも、商那

わしゆ せんびやくびく にとう ひも たいない えふく
和修・鮮白比丘尼等は、悲母の胎内より衣服ととのおりて

う たま

尊

ひとびと

えふく

与

生まれ給えり。これは、とうとき人々に衣服をあたえたる

ふぼ しゆくん さんぼう

清

厚

きぬ

進

のみならず、父母・主君・三宝に、きよくあつき衣をまいら

ひと

しょうなわしゆ

もう

ひと

らぎよう

しゃくしぶつ

せたる人なり。商那和修と申せし人は、裸形なりし辟支仏に

きぬ

せぜ しょうじよう

えふくみ

したが

きようどんみ

もう

衣をまいらせて、世々生々に衣服身に随う。憍曇弥と申せ

によん

ほとけ

欽 婆 羅 え

いつさいしゆじようきけんぶつ

し女人は、仏にきんばら衣をまいらせて、一切衆生喜見仏

たも

となり給う。

いま ほけきよう

きぬ

進

たも

によん

ごしよう

八

寒

今、法華経に衣をまいらせ給う女人あり。後生にはちかん

じごく く

免

たも

こんじよう

だいなん

地獄の苦をまぬかれさせ給うのみならず、今生には大難を

くどく

余

なんによ

公

達

衣

はらい、その功德のあまりを、男女のきんだち、きぬにき

ぬをか重さね、いろ色にいろをか重さね給たもうべし。あなかしこ、
あなかしこ。

けんじさんねんひのとうしじゆういちがつじゆうはちにち

建治三年丁丑十一月十八日

にちれん

日蓮

かおう

花押

おおたにゆうどうどののにようぼうごへんじ

太田入道殿女房御返事